ふるさと再発見

半田

山車の街、蔵の街、酒の街

南山大学教授　安田 文吉

▲半田市観光協会

▲酒の文化館

平成一九年一〇月七日、久しぶりに「はんだ山車まつり」に出かけました。実は平成四年一〇月三日の第三回山車まつりがNHKのBS11で生で放送された時の総合司会は僕でした。その時は観客用のスタンドの桟敷席も無く、あの広い会場にみんな立ったままからくり人形の操りを見ていたものです。それからすでに十五年、時日の経つのは早いものです。衛星放送を通して、半田の熱気を全国に届けました。久しぶりに尋ねた「はんだ山車まつり」は、以前にも増して熱気に包まれ、半田の人の祭に賭ける想いの強さに、またまた驚かされました。今回はそんな「動」の半田とはまた一味違った、「静」の半田を見て回りたいと思います。「温故知新」をもじった「温故知多新（おんこちたしん）」で知多半島の魅力を際だたせようと活躍する半田市観光協会の榊原安宏大番頭さんにお出ましを願ってご案内をいただきました。

知多半島のほぼ真ん中に位置する半田、そのほぼ真ん中にある半田市観光協会、ここから出発です。半田市観光協会は、JR半田駅で下車、駅前の大通り平和通り（県道一一二号線）を東へ、銀座本町二の交差点の、次の四つ角を左（北）へ少し進んだ左側に、木造二階建て、格子の入った瀟洒な家にあります。ここは元は、慶応四年（一八六七）から明治三年（一八七〇）にかけて、小栗家十代目三郎兵衛さんが建てた、寄せ棟作り桟瓦葺き総二階建ての住居と店舗。中へ入ると帳場があって如何にも江戸・明治期の商店の店先といった雰囲気。ここへ商店の番頭さんならぬ観光協会の大番頭さんがお出ましになるのです。因みに、ここは「萬三商店」といって文政一一年（一八二八）から、肥料・大豆・溜まりなどを商っていた所で、建物は平成一六年国の登録文化財に指定されました。

ここの筋向かいに「酒の文化館」（第三木曜休館）があります。知多半島は、言うまでもなく、酒造りが盛んで多くの造り酒屋がありますが、ここもその一つ。二百年前の酒蔵をそのまま利用しており、中は日本酒造りの道具と説明でいっぱい。二階の天井に置かれた正八角形の阿弥陀車は圧巻です。これは、酒造りに用いた六尺（径も丈も）の大桶を、二階へ上げて仕舞うための道具で、これを使うと、一五分の一の力で上げることが出来るということ。名称の由来は、八角形の車が阿弥陀如来の光背に似ているからで、昔は丁稚奉公の子どもたちにもわかりやすいようにと名付けられた、とは館長の大橋さんのお話。

▼酒の文化館内「阿弥陀車」

■安田 文吉

一九四五年生まれ。南山大学人文学部教授。幼少から名古屋の芸能文化に親しみ、主な著書に「ゆめのあと・諸本考」「幕末・明治名古屋常磐津史」がある。一九八七年よりNHK番組「北陸東海文さんの味な旅」などのレギュラーレポーターとしても活躍。

▲当時の包装と木箱

▲保存中のカブトビール現品

▲醸成貯蔵用木製樽実寸模型

▲倉庫の壁面にある木製樽の跡

▲倉庫の五重の複壁

▲カブトビール倉庫外観

こから西へ、県道二六二号線に出たら右折、暫く北へ進み、本町一の交差点を左折、国道二四七号線を西へ進むと、赤レンガ造りの珍しい建物が見えてきます。明治三一年（一八九八）建造のカブトビール工場。国登録有形文化財。設計は明治建築界の三大巨匠といわれた妻木頼黄（つまきよりなか）。味噌、溜まり、酢、酒の他に、明治のビール工場が半田に。もともと日本の物ではないビールを作るのには、今と違って大変な苦労があったと思います。例えば、低温で湿度の変化の少ないように、内面と外面との間に四重の空気層をもたせた五重の複壁は、その代表。ここだけのもの。これは当時ビールを造るには摂氏〇度で九〇日間熟成させる必要があったからだそうです。この他、ビール樽が二列横に並べてあったことがわかります、ビール樽の形の残った壁や、レンガ造りの耐火床など。当時ビール瓶の包装には藁苞を用い、木箱に互い違いに寝かせて入れて発送していたようです。蓋には、上部に右から「宮内庁御用達」、下部に「加冨登麦酒」、中央に登録商標の兜が描いてあります。工場の北側には広大な麦畑があったそうで、戦時中はそこを滑走路にしようとまで考えられたようです。このカブトビールは現在復元されていますが、当時は熟成に三ヶ月も要し、炭酸が少し抜けてしまったので、復元品も炭酸を少し抜いているそうです。試飲しましたが、上々の味でした。明治時代のビールですから、それだけでも価値があります。常時公開ではないので、お訪ねの際は半田市企画課（0569-21-3111）まで問い合わせを。

こからさらに西へ、柊町三東を右折、岩滑西町交差点を右折して、県道二六五号線を少し行くと、右側に新見南吉記念館。同交差点を左へ、知多半島道路を越えて、三つ目の信号を右折して道なりに行くと、南吉の養家へ。南吉は、東の宮沢賢治、西の新美南吉と称され、その文学活動はよく知られており、とくに『ごんぎつね』は教科書にも取り入れられています。この記念館は『ごんぎつね』の舞台となった中山にあり、展示場は半地下に建てられており、屋根はすべて芝生に覆われています。狐の住み家をイメージしたのかも。ここから北を見渡すと、矢勝川を挟んで少し向こうに、ごんぎつねが住んでいた権現山が見えます。矢勝川両岸は百万本の彼岸花でも有名。ここからさらに東へ、岩滑中町交差点を左折して少し行くと、南吉の生家。

再び県道二六五号線へ戻ってさらに東へ、県道は阿久比川を渡った住吉橋東交差点で右に回りますが、そこからさらに東へ直進、稗田川に架かった昭和橋を渡ると、向山神楽獅子で知られた市杵嶋神社に着きます。伝承によれば、慶長一五年（一六一〇）からの名古屋城築城にともなって、加藤清正が築石を運んだ台車が乙川八幡社の山車となり、また台車の露払いをしたのが向山獅子だったということです。ここの神楽獅子は、輿の上に獅子館と呼ばれる裳階をもった豪華な社に収められています。

▲新美南吉記念館の特徴的な芝生屋根

▲ごん狐のモデルか

▼権現山遠望

▲市杵嶋神社本殿

▼市杵嶋神社石橋

ここからちょっと戻って、乙川薬師町を左折、直進して県道二六一号線に入り、乙川吉野町を左折、半田大橋で右折、国道二四七号線に入り、JR線・名鉄線を越えて、出口町を左折、名鉄知多半田駅手前の雁宿町一を右折、坂を登ると雁宿公園。個々には一〇余りの記念碑があります。公園入口の鳥瞰図のついた案内図で、碑の位置を確認してから探索して下さい。童話作家で俳人の巌谷小波、小栗風葉(略伝付)、新美南吉(碑の謂われ付)の句碑・詩碑はぜひ見たいものです。

▲小栗風葉の碑

▲新美南吉の詩碑

▲巌谷小波の碑

雁宿公園駐車場から少し戻ってT字路を右折、最初の信号交差点を左折して進むと、白山神社。ここに「木のもとに汁も鱠も桜かな」なる芭蕉の句碑があります。社務所の前の、ちょっと小さな丸っとした石碑ですから、見逃さないように。この句は、芭蕉の俳諧七部集の四番目『ひさご』の発句(連句の第一句)。題は「花見」。句の意は「満開の桜の木の下で花見をすると、盃は疎か、汁にも鱠にも桜の花が降りかかって、桜まるけになってしまったことだ」。「花見」「木の下」は、能『西行桜』にある詞。元禄三年(一六九〇)三月の詠。芭蕉はこの句について、「花見の句のかかり(表現の趣、情趣)を少し心得て軽みをしたり」といっています。蕉風の「軽み」の始めの句。句碑の前の招き札(木札の上部が「入」字形なので)には、「白山神社の桜句碑/鎮守の森白山さんは村人の信仰も篤く昔から桜の有名なところで句碑もさくらに因んで建てられたでしょう/句表　木のもとに汁も鱠もさくらかな/芭蕉翁/句裏　山桜前もうしろもなかりけり/里桃/見て居れば人も見に来る桜かな/先愼/文政二(一八一九)龍舎己卯歳春」とあります。猶、この句の石碑は、豊田市の挙母神社境内にもあるそうです。

ここから西へ二つ目の図書館東交差点の西南に、半田市立博物館・図書館・空の科学館・体育館があります。半田を知るにはここもたいへん頼りになります。

▲白山神社の芭蕉の句碑

▲白山神社本殿

▲展示中の山車

▲句碑解説の木札

図書館東交差点を南へ、昭和町三を右へ、昭和町四交差点を過ぎると、右手に西山浄土宗の天龍山常楽寺。ここは文明一六年(一四八四)の開創。八世典空顕朗上人が家康の従弟だったところから、家康も、関ヶ原合戦以前に三度逗留。また、尾張藩初代藩主徳川義直手植えの松があります。本尊の阿弥陀如来は、頭部内側に「弘長三年(一二六三)七月日」の墨書があり、国重文。塔頭は、参道左に真如院・超世院、右に遣浄院・来迎院の四箇寺。なかなかの大寺です。

▼常楽寺本堂内部

▼常楽寺山門

▼塔頭真如院門

山門前の道を南へ直進、やや広めの県道三四号線を左折、名鉄線を潜って成岩橋交差点を右折、有楽町六の信号を過ぎたら、すぐ斜め右に入る道に入り、わかりにくい道ですが、とにかく住宅街を名鉄線に向かって進むと、線路際に「成岩城址」の石碑。成岩城は、かつて榎本了円の居城でしたが、天文一二年(一五四三)小川(東浦町緒川)の水野忠政(家康母於大の方の父)に攻められ、その後水野信元(於大の方の兄)の家臣梶川五左衛門の居城となりました。

▲成岩城址の碑

こから戻って、成岩橋交差点を直進すると、すぐ左手に鳥出山(鳳出)観音堂、続いて成岩神社。まずは観音堂から。ここには半田市指定文化財の十一面観世音立像・多聞天立像・地蔵菩薩立像があります。ここの木札の地蔵菩薩の解説に、「本像は、仏性寺の観音堂が常楽寺第八世典空上人の時代、地元信者の講によって移築された際、一緒に移されたと伝えられ…」とあります。仏性寺とは、常楽寺の建立以前に同地にあったとされる天台宗の寺。ただし確証はありません。境内には芭蕉の「疑ふな潮の花も浦の春」の句碑。この句は「二見の図を拝み侍りて」と題しています。句意は「二見浦の夫婦岩に砕け散る潮の花(飛沫)までも新春を寿いでいる、この浦の神の徳をけっして疑ってはいけない」。元禄二年(一六八九)の成立。碑裏には「文化七年(一八一〇)庚午之夏六月十二日浦連建 惟潜 曽工 花実方堂」とあります。続いて成岩神社。毎年四月中旬の祭礼の夜に、半田市成岩第四区獅子保存会により、江戸時代中期以前からあった大獅子小獅子の舞が奉納されます。大獅子は神楽獅子、小獅子は曲芸獅子ですが、小獅子は元々雨乞い獅子で、獅子頭はかつて龍だったといわれています。総じて獅子舞は邪悪なものを追い払って幸せ、健康をもたらすとされています。ぜひ一度お出かけ下さい。平成一九年一一月二五日に愛知芸術文化センター大ホールで催された「ふるさとの大獅子小獅子と歌舞伎」でも上演され、大好評を博しました。

ここから北へ、栄町四・栄町三の交差点を直進、中町交差点を右折、JR武豊線に突き当たった所を左折JR線を潜って暫く行った銀座本町五丁目の左側に薬局があります。ここが、半田の生んだもう一人の文豪小栗風葉誕生の地。尾崎紅葉の門下で、代表作は『亀甲鶴』『青春』など。誕生を示す石碑の右側面に、「舟歌のやんでものいふ夜寒哉」の風葉の句があります。

これで「静」の半田をぐるっと見て回ったことになります。ここからさらに北に進むと、広い道県道一一二号線に出ます。ここが銀座本町二の交差点。余力があれば、右折して源兵衛橋手前を左折して、川の両側の酢や醤油の匂い漂う真っ黒な倉庫群を見て、二本目を左折すると、今日の出発点、半田市観光協会。今回はここで旅を終えることにします。

▲成岩神社鳥居

▲芭蕉句碑

▲鳥出山観音堂

▲大獅子小獅子の舞の場

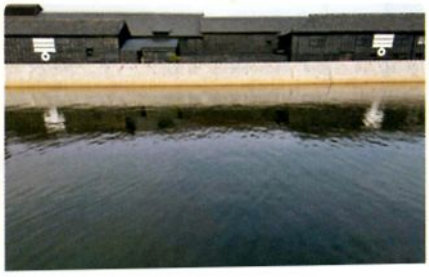
▲大獅子小獅子の舞の像

▲小栗風葉夫妻の写真

▲小栗風葉の句

▲小栗風葉誕生の地の碑

▲小栗風葉の生家

▲川沿いの黒倉庫群▼

▼博物館酢の里